ときどき
百姓
村について
文学と写真の
ルーラルマガジン
季刊マガジン令和5年9月9日第2号

Desde Higashiyoshino

東吉野村から

ときどき百姓ルーラルマガジン

TOKIDOKI HYAKUSHŌ

Revista rural

no.2

La tierra es un territorio comunitario

土地は共同体自身の「領土」としての土地である

PRODUCCIÓN	**共同制作**
Higashiyoshino	東吉野村
Tokidoki Hyakushō Editorial	ときどき百姓発行
EDICIÓN Y DISEÑO	**編集とデザイン**
Andrés Camacho	アンドレス カマチョ
TRADUCCIÓN Y EDICIÓN EN JAPONÉS	**翻訳 編集**
Takami Kaori	高見芳織
Aoki Ayaka	青木彩香
AUTORÍAS	**内容**
Aoki Miako	青木海青子
Andrés Camacho	花万著　アンドレス
Aoki Shimpei	青木真兵
Fukui Takahisa	福井孝尚
Casandra Casasola	カサンドラ　カサソラ
Imagawa Eri	今川恵里
Nishioka Kiyoshi	西岡潔
Luvia Lazo	ルビア　ラゾ
Liliana Filomeno	リリアナ　フィロメノ
Masuda Yuya	増田雄也
AGRADECIMIENTO PERPETUO	**協力**
Susana del Rosario	スサナ　デル　ロサリオ
Aino Ryoko	相埜良子

Revista rural

TOKIDOKI HYAKUSHŌ

ときどき百姓ルーラルマガジン

「ときどき百姓について」

この季刊ルーラルマガジンは現代の日本「村」の暮らしとメキシコの「村」の暮らしを今の歴史としてドキュメントしています。日本とメキシコの村のコミュニティーと自然界の関係性にフォーカスしています。そして、現代に村で暮らす日本の村民やメキシコの村民が小説と写真で思い出や文化を発信していきます。我々のマガジンはバイリンガル「日本語とスペイン語」で読むことができます。

Revista bilingüe, español y japonés, de cuento y fotografía, donde echamos chisme sobre la dialéctica sociedad-naturaleza de los espacios rurales en México y Japón. Nos interesa reflexionar desde los diversos y cambiantes mundos campesinos, los cuales, ven en la tierra su territorio: Un lugar donde se manifiesta cultura, memorias, experiencias, ideas y un lenguaje de sensaciones donde se puede asir la lógica con la que sueñan.

Índice

索引

No. 2

第二号

Textos breves sobre Hyakushō
百姓についての文章

Andrés Camacho
百姓がいるところには Ahí donde hay campesinxs —— 10

Aoki Shimpei
百姓と神話の論理 Lxs hyakusho y la lógica de los mitos —— 12

Cuentos
短編小説

Aoki Miako
月夜の酒宴 Noche de copas a la luz de la luna —— 16

Andrés Camacho
卑弥呼 Himiko —— 22

Foto
写真

Liliana Filomeno
リリアナ フィロメノ —— 34

Fukui Takahisa
福井孝尚 —— 44

Casandra Casasola
カサンドラ カサソラ —— 56

Masuda Yuya
増田雄也 —— 68

Nishioka Kiyoshi
西岡潔 —— 80

Luvia Lazo
ルビア ラゾ —— 92

Andrés Camacho
花万著 —— 102

Imagawa Eri
今川恵里 —— 124

MURA ES CHIDO • Ohtani Saiki
大谷彩貴 —— 136

百姓は
農民ではない
可能性が
百ある
Hyakushō no significa hombre campesino agricultor, sino la posibilidad
de cien figuraciones campesinas

百姓がいるところには
Ahí, donde hay campesinxs

アンドレス カマチョ
Andrés Camacho

日本人に「百姓とは何か」と尋ねると、即座に「百姓は廃語であり、農民に対する蔑称である」と断定的に答える人が多いようです。それは、網野善彦によれば、学校の教科書も、戦後の歴史修正主義の本も、現代の辞書も、すべて同じ百姓の定義を示唆したからです。しかし、百姓はヴァルター・ベンヤミンが言ったように、近代に移行した別の時代の言葉のように、翻訳や定義が不可能なものです。その意味で、この文章やときどき百姓ルーラルマガジンは、百姓とその可能性についての（必要な）解釈でしかありません。

明治時代（1868年～1912年）は、日本が近代化とその文明開化のプロジェクトに激しく遭遇した時代でした。これは、技術、産業、通信の面だけでなく、アイデンティティ、文化、太古の過去を持つ国家の形成という点でも同じでした。日本が均質な社会として構築されるまでの長い道のりの中で、「日本は単一民族」「島国論」「稲作一元論」の3つの主要な考え方に基づく単一国家であることが主張されました。

百姓とは農民のことではなく、百の名前、百の可能性を意味します。つまり、近代以前の日本では、列島に住む「普通の人々」の名前として複数の形象が使われていたのですが、これは中国でも百姓という言葉が持つ用法です。百姓の多様な可能性は、百姓の活動の多様性や、百姓の住む地域の多様性を示し、百姓を固定したものとして定義することを難しくしています。百姓は、経済システムや数字の量的な論理よりも、人や地域の価値の論理が優先される生物社会システムの中で生きています。土地は富を生み出す場所だけではなく、共同体自身の領土としての土地であります。共同体自身の領土はルーラルコミュニティのアイデンティティが根付く場所であり、現実、想像、象徴が絡み合う場所です。あの場所は百姓の権利であり、天然資源の集団所有であり、集団の記憶、経験、物語、共通言語のランドマークが残る場所なのです。

日本における経済成長とアメリカ資本主義システムの貪欲な導入に伴い、山は次第に「辺境」「衛星」化していきました。これは、山や百姓が中央の経済システムに吸収される一方で、中央の経済システムが彼らを周縁に置いていたことを意味します。ルーラルコミュニティと山は、メガ・インフラ・プロジェクトや観光産業の「発見」「療養」の場となったのです。大都市に権力が集中したことで、百姓のディアスポラや、自然支配を志向する経済システムによる家計経済の崩壊にもかかわらず、山とルーラルコミュニティは自分たちの存在を確保するために再編成しなければなりませんでした。しかし、百姓とその山には、自分たちが自然の体現者であるという論理があり、自然環境は簡単には屈しないからこそ、夢を見続けることができます。百姓がいるところには抵抗があるのです。

TOKIDOKI HYAKUSHŌ *REVISTA RUAL*の第2号を可能にしてくれた人々、特に著者と読者に感謝します。想像力とその力は、このような関係の中にこそ根付いているのです。

百姓と神話の論理

Hyakushō y la lógica de los mitos

青木真兵
Aoki Shimpei

前号では、百姓は農民だけを意味するわけではないことを述べました。その時に参照した歴史家・網野善彦の研究は、中・近世という前近代の時代を扱ったものでした。ではこれからの百姓はどのような人びとなのでしょうか。前近代と近代にはたくさんの大きな違いがあります。そのうちの一つが「働き方」です。

現代社会のように、多くの人びとが会社に就職し、そこからの給与だけで生活を成り立たせることが可能になったのは、人類史においてもごく最近のことです。日本の場合は太平洋戦争後、製造業やサービス業の発展に伴い、雇用される者である「サラリーマン」は増えていきました。就業者に占める「サラリーマン」の割合は、1953年には42.4%だったのが、1959年には約50%になり、1993年には約80%を超えました。2005年には約85%まで増加しています。

前近代では季節ごとに違う生業を行い、また日銭を稼ぐ仕事も一年を通して同じということはありませんでした。確かにこの時代は天候などによって人々の生活が左右されやすいこともあり、安定には欠けていました。その不安定な生活を改善するために、近代にはさまざまな文物が商品化され、各地に流通可能な状態をつくっていきました。その商品は貨幣を媒介に売買されるので、お金さえあれば誰でも同じように商品を手にすることができるようになりました。近代はそのような「自由」と「平等」を達成したといえます。

しかしさまざまなものが商品化し過ぎた結果、文物はお金がなくては手に入れられなくなってしまいました。僕が問題視しているのは、社会のあらゆるものが商品化していく中で、人間のことも商品としての価値しか認められなくなってしまったことです。僕たちは自分の労働力を商品として提供することで、その対価を受け取って生活しています。しかし社会全体が商品化し過ぎた結果、そもそも商品化できるものしか価値がないと考えるようになってしまったのです。

本来は人間の中には労働力という商品化できる部分と、感性のように商品化されない部分があります。この二つがあってこその人間なのですが、現代社会では商品的な価値だけが認められるようになってしまった結果、自分もその社会的な眼差しを内面化してしまい、自らの価値を商品化できる労働力の中にだけ求めるようになってしまったのです。こうなると、お金を稼いでいないと自分の価値がないと考えるようになってしまいます。

就職活動がうまくいかなかったり、失業してしまったり、対価が発生しない家事を押し付けられたりすると、自分は生きている価値のない人間だと思ってしまう。反対に、どれだけ倫理的に良くないことをやっていても、多額のお金を稼いでいるだけで、無条件に価値の高い人だと認められてしまうのが現代社会です。

安定を求めて就業者のほとんどが「サラリーマン」となった社会は、商品偏重の社会になってしまいました。百姓になるには、商品を前提としない前近代的な「手づくり」の原理を取り戻す必要があります。手づくりの原理は、宗教学者・中沢新一のいう「神話の論理」にとても近いものです。

「神話は特有の論理をもって語られます。その論理は一見すると、私たちが普通「論理」と呼んでいるものとは、だいぶ異質な働きをしています。人間と動物が変身によってたがいの位置を融通無碍に入れかえたり、おたがいの果たしていた機能を逆転させてしまったり、とにかく「A＝AでありA＝非Aでない」という通常の論理が通用しなくなるのです。（中略）しかも神話は「感覚の論理」をもちいるために、いっそう非合理的な印象を与えます。感覚の論理とは見たり、聞いたり、匂いを嗅いだり、味覚で味わったり、皮膚で触ってサラサラやベタベタといった触覚をもったりといった具体的な感覚を素材にして展開される論理です。」（中沢新一『人類最古の哲学　カイエ・ソバージュⅠ』講談社メチエ、2002年、14-15頁）

これからの百姓は、商品の原理と手づくりの原理を行ったり来たりする人です。そのためにはまず、手づくりの論理を取り戻すこと。それは神話の論理を直感できるようになることでもあります。

Librería de Humanidades ***Lucha Libro***

人文系私設図書館 ルチャ・リブロ

lucha-libro.net

instagram/luchalibro_library

月夜の酒宴

Noche de sake a la luz de la luna

青木海青子

Aoki Miako

「キヨさんのところに行くのは、やめときよ」

母は口癖のように美津子にそう言っていた。美津子の近所で一人暮らしをしているキヨさんには、色んな噂がつきまとった。怪しげな宗教にはまっているとか、変わり者で協調性がないとか。事実地域の清掃や集まりにはあまり顔を出さないキヨさんだったが、高齢で独居の人が外出や近所づきあいから遠ざかるのは美津子のすむ村内では特に珍しいことでもなかった。村の大人たちが何をもってキヨさんのことを「変わり者」だとするのか美津子にはよくわからなかったが、美津子は変わり者と噂されるキヨさんと会って話すことが好きだったし、キヨさんも小さな来訪者を楽しげに受け入れているように見えた。

キヨさんの家は、村内を流れる川を渡った橋の向こうにあった。築80年ほどの古い家の周りは果樹や季節ごとに花をつける木が並び立っており、野鳥にシカ、タヌキやアナグマも時折憩いを求めてかこの庭にやってくる。今は門のところに少し雪が残っていて、木々が葉を落としているので、鳥たちの姿がよく見える。いつか読んだ本に出てきた森の魔女の家のようだった。山間のこの村では村内の移動ですら車が必須で、村の友達の家に遊びに行くにも母に車を出してもらっていたが、美津子のうちからキヨさんちへは少し足を伸ばせば子どもでも歩いて行ける。ただ道々では人気も街灯も少ない場所もあるため、美津子の母はそのことも懸念していたのだと思う。けれど美津子にとっては、キヨさんと何気ない言葉を交わす時間が大切に思えた。今日も、橋を渡る。

「こんにちは」

美津子が庭先から声をかけると、縁側の方からキヨさんが迎えた。キヨさんは今日はベージュのレースシャツの上に水色のカーディガンを羽織っている。

「あら、みっちゃん。もう学校終わる時間やったか。おかえんなさい」

「ただいま」

「お茶いる?」

「うん」

家の一番奥に位置する台所へ向かうキヨさんの足元には、老猫の小太郎がくっついて回る。時々キヨさんから「転びそうになるやんか」と怒られているけれど、それでもキヨさんを追いかける。美津子の足元に甘えてくることもあるが、キヨさんに向かっていく時ほどの情熱は見せない。美津子はキヨさんと小太郎を見送って、縁側のだるまストーブの隣に腰掛けた。

「お煎餅あったわ」

程なく煎餅ときゅうす、青い茶碗を二つのせたお盆を両手で持って、キヨさんが戻ってきた。小太郎は伸びをしながらキヨさんを追いかけてくる。

「ありがとう」

一緒に縁側に腰掛けて、庭を眺めながら温かいお茶を啜った。

「みっちゃん、後で薪運ぶの手伝ってくれへんか。今年はえらい減りが早くてな」

「ええよ」

美津子はこくりと頷く。美津子の家では風呂を沸かすのに灯油ボイラーを使っているけれど、キヨさんちに通うようになって薪で沸かす風呂というものを知った。美津子にとっては新鮮で楽しいお手伝いの一つだった。そんなことを考えていると、ふと、家の奥から漂う香りに気がついた。

「キヨさん、もうご飯炊いたん?なんか、ご飯の匂いする」

「あら、よう分かったな。あれは私のご飯とちゃうよ」

「誰のご飯?小太郎とちゃうやろ?」

「雪の頃にな、あずきご飯に、油揚げを醤油で炊いたんを山の道に置くんよ。お供えやな」

「なんで置くん?」

美津子は不思議そうに首を傾げた。

「雪の頃は山に食べ物あれへんやろ。動物も困っとるやろからって置くんよ。 私はこっちにお嫁に来たけど、元いた村でもしとったよ。 山で暮らしてるもん同士、助け合わんとな」

おとぎ話にでも出てきそうな話だけれど、キヨさんは大真面目話していた。「そうや、油揚げ炊くのに使た煮干し、小太郎にあげよ思とったんや。」というとまた奥の台所にパタパタと戻っていく。美津子の狐につままれたような気持ちばかりが縁側に残された。雪にぽつんと置かれたあずきご飯や炊いた油揚げがのった御膳を思い浮かべると、誰かしらの不在が際立つ光景のような気がした。

夢を見た。キヨさんちを尋ねると家主は不在で、庭にも姿が見えない。庭の脇から裏山に続く道を上ってみると、木々が美津子を待ち兼ねていたようにざわめいている。ざわめきに気を取られていると、いつの間にか辺りも日が暮れてとっぷり暗くなり、白い月まで上っている。暗い中、人気の少ない道を歩いて家路に着くと父母に叱られてしまうので、美津子は慌てて引き返そうとしたが、ふと、ざわめきの中に話し声や旋律が紛れている気がして足が止まった。振り返ってみると、木々の重なりの奥の方に、ほのかに明かりの灯った一角が見えた。そこからワイワイと話し声や賑やかな笛太鼓、歌声が漏れ聞こえてくる。美津子は足元の木の枝を踏んで音を立ててしまわないように気を付けながら、そっと明かりの方に近づいた。木々の向こうで、黄金色の明かりに包まれ、タヌキや狐、鬼のような姿の者やお椀や琵琶に足が生えたもの、人に見えるけれど首がやたら長い者、火の玉までもが、楽しそうに酒宴を開いていた。そこら中に徳利や酒碗が転がっていて、真ん中には見慣れた御膳があった。あれは、キヨさんちにある御膳だ、と思った。御膳にのせたあずきご飯や油揚げを、酒の当てに美味しそうにつまむ者たちもいて、「甘露、甘露」と嘆息していた。ふとその向かいに、人間の姿をしている者を見つけた。あの背中は、キヨさんだ。キヨさんは酒や御膳のものを美味しそうに食べる者たちを目を細めて眺めていた。その姿を見とめて、不意に美津子は「食べたらあかん」と思った。なんでそう思ったのかは自分でもよく分からないのだが。けれど、取り越し苦労だったようで、酒や食べ物を勧められてもキヨさんはニコニコと辞退していた。キヨさんの背中を見るうちに、目が覚めた。

美津子は自室の天井をぼんやりと眺めながら、目が覚めてしまったことを残念に思った。体をひねって横向きになると、薄暗い中にいつもの学習机や襖が見える。襖の二間先の居間からはほのかに明かりが漏れ、美津子の両親の話し声が聞こえてくる。

「やっぱり中学からは私立の方が…」

「学力が高いのは、北部の方の学校やろうし…」

「けど、親父らが足腰立たんくなった時に、近所にいてないのは…」
「お義父さんらのことで美津子の進路が変わるんは…」
母の声が段々、甲高く響くようになり、美津子は毛布を被って耳を塞いだ。母は美津子の進学のために村を出たいと考えていて、父は祖父母の側にいるために村に暮らし続けたいと考えていて、この平行線はなかなか交わらない。美津子の前でも父の前でもそうは言わないが、母は多分キヨさんみたいになりたくないから村を出たいんじゃないかと、美津子は考えている。母も祖母も、キヨさんも、外から村にお嫁にやってきた人たちで、キヨさんに至ってはそのまま一人きりになっても村に暮らしている。母は将来一人残されることが怖いのではないだろうか。祖父は代々この地に住んで家を守るということを大切に考えている。それも分かるけれど、祖母や母、キヨさんみたいに女の人が移動してやって来てくれるからこそ保たれているのでは、という言葉が喉まで出かかっては漂っているのだった。
「キヨさんは、ここでひとりぼっちと違うんやろか」
美津子の独り言は、夜の帷に吸い込まれていく。

その日、美津子はキヨさんの家に寄り、庭先で二つ三つ言葉を交わしただけで帰ってきた。
「ああ、みっちゃん。おかえり。今日も寒いね」
「今日の夜はめっちゃ気温下がるっていうから、寄り道せんと早よ帰りって」
「ふふ、寄り道しとるやん。それやったら、今日はお手伝いもええから、早よお帰り。あったかくするんよ」
キヨさんはいつもと変わらず、ニコニコと美津子を送った。小太郎は寒さを避けて家から出てこなかったので、顔を見られなかった。いつもより早く床を取ると、美津子はまた夢を見た。夢の中で再びキヨさんちを尋ねると不在で、姿がない。月明かりに照らされて、また庭の小脇から裏山に続く道を上ってみると、木立の奥に見覚えのある明かりが見える。木の枝を踏んで乾いた音を立てないようにそっと近づいて覗いてみると、やっぱり狐やタヌキ、赤い顔をした鬼や火の玉、異形の者たちが酒宴を開いていた。お椀に手足の生えたつくも神は、自らに酒を注がれて酔っ払っていたし、琵琶に手足の生えた者は自らをかき鳴らして座を楽しませている。そこここから笑いさざめく声が上がり、誰もが上機嫌だった。一人一人を観察していくと、今日も見慣れた背中を見つけた。水色の　カーディガンを羽織ったキヨさんだった。横には

ちゃっかり小太郎も座っていた。キヨさんはこの座の中で、今日はとてもリラックスしているように見えた。笑い方も何だか開けっぴろげで、どこか少女のように映る瞬間すらあった。そのことが美津子にはどこか心細く感じられ、隠れていないでこの座に乗り込んで、キヨさんを連れ戻そうかとすら夢想した。そんな考えを弄ぶ内、前回のようにキヨさんが周りから酒や食べ物を勧められた。

「あかん、食べたら」

咄嗟にそう考えたけれど、キヨさんは嬉しそうに盃を傾けて、「甘露、甘露」と酒をあおった。その表情が本当に幸せそうだった。小太郎もその隣で、何やら食べ物を貰って美味しそうに食べていた。美津子はついにキヨさんを連れ戻せないまま、こっそり踵を返したのだった。

そこで目が覚めた。休日なのでいつもよりはゆっくり目覚めたのだが、ストーブで暖まった居間に出ていくと大人たちが右往左往していて驚いた。

「何、バタバタしてるん？なんかあったん？」

「なんかってあんた、今起きたんか」

「そうやけど…」

「川向こうのキヨさん、亡くなりはった。昨日の夜調子悪くなって救急車呼びはったんやけど、今朝病院で亡くなったって」

「…えっ…」

「キヨさんの息子さんが東京から帰ってきてはるそうやわ。最後病院で会えたみたいやね。隣町のホールでお通夜と告別式するんやそうやから、準備せんとね。あんたもお別れに伺おうか。お世話になったもんな」

生前は「キヨさんのうちへはあまり行くな」と諌めていた母だったけれど、キヨさんを親しく思っていた美津子の気持ちはここでは否定されず、少しホッとした。

「あ、う…うん。キヨさんは、今は」

「病院で眠ってはるよ」

「あ、こ、小太郎は？」

「ああ、猫の。息子さんホールに向かう前に家寄るやろうから、見てきはるやろう」

「そう…」

頷きながら、多分小太郎も、向こう側の世界に行ってしまったんじゃないかと思った。あの夢は、夢ではなかったのだ。キヨさんは時折山に入って向こう側に世界と戯れていて、最後は本当に向こう側への橋を渡ったきりに

なったのだ。向こう側の食べ物を口にしたら、向こう側の人間になる、というのは、黄泉竈食のようでもあった。けれど、酒を前にして「甘露、甘露」と顔をほころばせたキヨさんを見て、こちら側の世界に引き留めることは美津子にはできなかった。

「キヨさんは、ここでひとりぼっちと違うんやろか」

雪にぽつんと置かれたあずきご飯や炊いた油揚げがのった御膳は、誰かしらの不在が際立つ寂しい光景のような気がしていた。だけど、山の奥でこちら側と向こう側が交わる酒宴が開かれていて、どっこい生きていたのだとしたら、それは美津子の知っている「ひとりぼっち」とは随分離れているような気がした。怪しげな宗教にはまっているとか、変わり者で協調性がないとか言われていたキヨさんだけれど、美津子だっていたし、山の中の秘密の友人達だって側にいたのだ。

学習机と反対側の窓を開け放すと、雪が舞い始めた。地面に落ちては溶けて滲んでシミになりを繰り返し、まるで誰かが俯いてハラハラと泣いた跡のようだった。こんな季節の中でも、白木蓮や桜はその指先に蕾を携えている。村の季節は確かに静かに巡っていくのだった。

卑弥呼
Himiko

カ マ チョ
花万著
Andrés Camacho

翻訳・編集
高見芳織・青木彩香

『同時に野蛮の記録でない文化の記録は決して存在しない。』
Walter Benjamin

カメラを手にしたふみこは、百姓同盟の女性たちと一緒に水田の中に横たわっていた。逮捕状を手に近づいてくる警官隊に対して、投石を開始する合図を待っていた。第一部隊が山口家の前を通り、第三部隊が雑草の生い茂る狭い道を通ったとき、アルミのドラム缶が坂の方で鳴った。すると、ぬかるみに刺さったトゲのように、女性たちは急斜面の溝から飛び出し、警察に向かって大量の石を投げつけた。雑草の中からこん棒とヘルメットで武装した教員養成学校の学生が現れ、警官が河川敷に向かうのを阻止し、残りの百姓はブルドーザーとパトカーを奪うために後方から攻撃した。子供たちは、各戦線にあらゆる投げ物を調達し、旗を上部に立て、ドラム缶を鳴らし続ける役割を担っていた。ふみこはゆうさんから目を離すことなく、頭上に石が飛んできたところでシャッターを切った。その瞬間、ドラム缶に跳ね返った流れ弾がゆうさんの額を貫き、泥と血にまみれて水田に倒れた。この戦いはさらに数時間続いたが、悲鳴や罵倒は、かつて百姓たちが住んでいた家屋を焼き払う炎や、大地をかき回す機械の音の中で次第に消えていった。

ふみこはカメラとネガを持って村を出た。数か月前に村へやって来た時と同じ山の方へ入っていった。当時は山に桜の花が咲いていたが、今は緑色の葉が、松明のように暗闇に輝いている。ところどころにトタン板が貼ってある、小さな木造の小屋に避難した。床にはマットが何枚か敷かれている。湿った匂いが漂っている部屋には窓がなく、竹の棒で作られた扉の隙間からわずかな光が差し込む。その小さな小屋は二本の溝の間にうもれており、まるで大地に飲み込まれているような状態だった。そのおかげで、警察が彼女を探しに山に入っても、小屋に気づくことなく通り過ぎて行った。ふみこはその廃屋で、この小屋ごと自分自身が闇に飲まれないことを願いながら一夜を明かした。事態が収まるのを見計らい、峠を越えて倭という名の村へ入り、港へ向かう電車に乗った。線路は新しく、駅はまだ工事中だったが、周辺の道路はすでに舗装され、新しく拡幅された道路が駅へと続いていた。電車に乗り込んだふみこは、車両の一番後ろの座席に腰を下ろし、リュックを横に置いた。車内の壁には「*Discover-Wa!*」と書かれた広告が一面に貼られていた。この国の避けられない近代化や経済成長においては、後進地域ほどうまくシステムに統合されるだろうと新聞やテレビでは報じられていた。その一つが観光産業で、オリンピックや万国博覧会など、前年の大規模な催し物による急速な鉄道拡張を支えるために、「*Discover-Japan!*」というキャンペーンを展開することにした。これは、田舎や農村を訪れて本当の日本のルーツを見つける、という確固たる決意のもとに行われたものである。テレビ広告や駅の看板、新聞の紙面には、人通りが少ない道、広大な水田、山の上の神社、不思議な儀式、幽霊屋敷のような旅館などが掲載された。西洋の近代化計画によって日本の幻影がすでに消え去り、現在のように産業化や大都市への人口集中が進んでしまった以前の本当の日本に触れられるのが農村地域だと考えられていた。そのイメージを構築するために、必然的に百姓たちは土地から追い出され、彼らの村は観光客が探検するにふさわしい自然の風景へと変えられた。さまざまな地域の農村から百姓が排除されると、村で話されていた言語、音、蓄積された文化、共有された記憶までもが淘汰された。その複雑さを理解しやすいように魔術的なリアリズムを施すと同時に、「やっと帰れる場所」として、ふるさとという観光公園が建設された。

電車は港を囲む山に入る手前で停車した。ふみこは、乗り降りする人々にも、乗り換え案内のAIによる無機質なアナウンスにも関心を持たず、大学でのデモ活動やバリケードが始まった頃に撮ったモノクロの写真集に目を向けていた。写真の端に佇む少年は、若者のプライドと、中立の幻想を

抱いて直立していた。彼の額の白いハチマキに書かれた文字は、青春の汗で爆発しているかのように広がっていた。敗戦を生き延びる権利などないことを知りつつ、少年は別れの恐怖を感じながら中央にいる少女を見つめていた。そして彼女の目には、月の輝きを思わせる幻影のようなベールが浮かんでいた。月の輝きは、消えゆくまで暗い深淵に浮かんでいるのではなく、誰かに依存して輝いているのだ。その少女は、チャヤノフ派と書かれたプラスチック製のヘルメットをかぶっていた。頬には小さな傷跡があり、肩まで伸びた髪の間に隠れていた。ほんの数週間前、佐世保港でアメリカの原子力空母「エンタープライズ」の入港に反対する大学生グループによる抗議活動が行われたとき、催涙ガスを浴びた学生たちが病院に駆け込み、闘争に戻るための治療を受けた。しかし、警察が学生たちを排除し、抗議活動への復帰を阻止するために病院に突入したとき、少女の近くでガラスが爆発し、頬骨の下に傷を負ったのだ。カメラを見つめる彼女の視線は、抗議というゲームに要求される真剣さを保とうと、今にもゆるみそうになる無邪気な唇の動きをコントロールしていた。左側に写る少年は、死を恐れずごまかさない者のようにふざけた仕草で、思い込みの理想に熱中する者の眼差しを向けていた。3人の背後には、学長室の入り口に机が積み上げられ、その上には「大学解体」を宣言する赤と白の横断幕が掲げられていた。

その年、全学連を構成する諸派は、大学の構内でも街頭でも暴動を繰り返した。ふみこが思想的な写真に取り組むようになったのは、このような反体制の嵐の中であった。ふみこは闘争心に身をゆだね、芸術的卓越性というパラメーターに反して、自分の写真で何かを挑発したいと意識した。規制の秩序に対抗する暴力的で曖昧な闘争場面の結果であるかのように、フィルムの破れ、粒子の粗さ、傷などを加工した。新聞やテレビでは、学生たちの抗議活動は不条理で暴力的で正当性に欠けるものとして、執拗に報道された。これらのメディアでは、カメラマンは常に学生団体から距離を置いていたため、抗議している学生の深層心理は少しも報道されなかった。「もちろん、闘争は曖昧なものだ」と新聞に掲載された記事を読んだふみこは思った。闘争が正義か不正義か、合理的か非合理的か、そして真実か偽りかを断言するのは不合理なことだ。特に真実が幻想であるということが忘れ去られている中で。もうしそうであるなら、幻想は操られ、喚起されなければならない。ふみこにとって、その可能性は写真にあった。学生たちは一般的にあまりにも国家や組織の色に染まっているが、

ふみこはそこから脱却しようと決意していた。そして、それは決して非合法な闘いではないと信じていた。

学生運動の最盛期には、列島各地のさまざまな派閥が156の大学を占拠し、バリケードを築いた。ふみこが撮影していた構内は、日中は抗議の場であると同時に、活動が終わると歯を磨いて眠る場所でもある。当時、チャヤノフ派の写真や映像を学ぶ学生たちは、毎週講堂に集まりドキュメンタリー映画を観て議論していた。学生たちはさまざまな点で対立する考えを持ちながらも、映像や写真は人々を教育し、動員するために体制から引き出すことができると思っていた。特に、成田空港建設のための土地売却に反対した農村地域、三里塚の人々の抵抗を記録したドキュメンタリー『日本解放戦線－三里塚の夏』では、怒りが爆発した。三里塚には、このドキュメンタリーの監督である小川伸介をはじめ、さまざまな派閥の学生たちがやってきて、反対同盟として知られる百姓の抵抗グループに直ちに加わった。このドキュメンタリーでは、主体と客体の境界線が曖昧にされていた。小川と彼のチームは、農作業、地域の対話、領土防衛に携わった。何年もの間、彼らは三里塚に住み、土地が収容されるまで百姓たちとともに抵抗した。小川は日本の田舎を、見いだされるべき風景としてではなく、土地との永続的な関係から脱却できない百姓たちが抵抗する戦場として映し出した。

チャヤノフ派は当時、国内の農村学校の学生たちによって構成された集団で、社会と自然の弁証法、農村空間と経済システムの関係について考える可能性を大学にもたらしたいと考えていた。広大な畑はあるものの、そこで働く百姓たちにとって本当のユートピアは神話にすぎないと言われていた。田舎育ちではないふみこは、『山の子供たち』というドキュメンタリーの中で、さまざまな百姓の世界を撮影することに深い関心を抱くようになった。このドキュメンタリーでは、村の子供たちが卑弥呼を題材にした人形劇を見ている場面がある。邪馬台国の治世下で中央列島のさまざまな村を束ねて支配していた女性・卑弥呼が、自分はまさに天照大神の生まれ変わりであることに気づくという物語である。ドキュメンタリーでは、ある少女が卑弥呼の生まれ変わりとなる世界を、山の中で展開しようとする姿を追っている。あるシーンでは、家族が作ったお茶を隣村に届けに行くために山に入る。途中、他の子どもたちと遊ぶために立ち止まり、カメラのレンズのように指のフレームに彼らを収め、ウィンクして架空のカメラのシャッターを切る。一人の子どもが茂みの中で「暗すぎるけど、ちゃんと写真が撮れるかな」と尋ねるが、少女は「私が太陽そのものだから心配ない」と答える。

あるチャヤノフ派の会合では、腹崎をドキュメンタリー化する可能性について話し合われた。腹崎では、川の流域に大規模な公園が建設され、ホテルやショッピングモール、鉄道駅を含む観光ルートが計画されており、この地域の商業開発が可能になるという。川沿いに住んでいない住民はすでに土地を売ることに同意しているようだが、川周辺に住んでいる百姓たちは同意していない。彼らは川の水を使って紙を作り、米や豆を栽培しているので、今後も反対し続けるだろう。しかしながら、三里塚のように土地が収容される日もそう遠くはないだろうと、チャヤノフ派のリーダーは語った。大学の占拠は1年あまり続いたが、警察が明け渡しを請求し、学生運動のリーダーたちを逮捕した。その間、『バリケード』という写真集を出版したふみこは、破壊工作物頒布罪と暴力助長罪に問われ、間もなく腹崎に逃亡した。

＊

山桜は木によって時の流れが異なるため、それぞれのペースで花を咲かせ、散っていく。それと同じように、村の若い女性たちはそれぞれ四国八十八ヶ所を巡礼して帰って来る。すべての寺を巡って2，3年で帰って来る者もいれば、一部の寺だけを回ってすぐに帰って来る者もいる。この間、彼女らは知らない土地を訪れては自分たちの村の話をする代わりに、その集落に滞在させてもらった。ななとももがふみこと出会ったのは、巡礼を終えて腹崎に戻る途中だった。神功皇后が朝鮮半島進出の戦勝を祈願したとされる、神峯寺で働く女性の家に、3人で泊まった。真美という名の彼女の主な仕事は、寺の筆耕係で、公文書から土産物まで、あらゆる筆書きを行っていた。真美の家は4代にわたって寺の運営を担ってきたが、男兄弟がおらず、結婚もしていなかったため、父親が亡くなると、家長となり寺の管理を継ぐことが誰もできなかった。4人は火を囲んで夕食をとり、いろいろな話をした。真美は、この辺りの山では大昔、神社仏閣の公文書だけでなく、権力の行使でさえ女性が担うのが日常だったと説明した。それは、女性があの世と繋がっているだけでなく、軍事的な優位性を持っていたためでもあった。食事をしながら、ななとももは腹崎盆地の話、単眼の巨人キュクロプス王と腹を切られて水に身を投げた女の話をし、ふるさとの思い出がないふみこは、大学のバリケードの話をした。

数日後、3人は一緒に腹崎に到着した。巡礼から帰ってきた女性たちに混じって、村の外から誰かがやって来るのはめずらしいことではなかった。彼女たちは歓迎され、誰も村に来る理由を疑わなかった。ふみこはいつもカメラを首から下げて、どんな仕事にも参加した。山口の窯で炭をおこすために薪を集め、腹崎盆地の土と水から紙をすく作業を手伝い、田植えの準備をした。百姓の世界を撮影するには、全身を写真に収めることが重要であり、そうでなければ農民社会と自然との間の複雑な弁証法を理解することはできない。農村の領域と人間の身体との実存的な関係は、それが時流に逆らう論理であることを理解できない人々によって、しばしば不思議なこととしてとらえられる。もし百姓が経済システムの暗示に抵抗して存在するとすれば、それは自然が簡単には従わないからであり、その結果、百姓も従わないのである。その点で、写真は自然を再生産し、百姓の抵抗をも再生産する力を与えているのだろうとふみこは考えた。

腹崎に夏が訪れたのと同時に、女たちは田植えを始めた。ゆうさんはふみこに、苗の束を手に取り、苗が倒れないように浅すぎず、また深すぎない程度に植える方法を教えた。そして、すべては土と水と太陽のおかげで稲が育つと話した。ふみこが手ほどきを受け、他の女たちが田植えの準備をしている間、田植えの際には男たちが苗を運ぶ手伝いをするのだと話した。しかし、いつも女たちは苗が運ばれてくる前に手植えを終えてしまうので、男たちに泥や石を投げてからかったり、何もまともにできない役立たずだとこき下ろしていた。女たちは話しながら作業をしていても、男たちより上手に早くこなしたので、男たちが田植えに加わることはまれだった。さらに水田での作業は、女たちが日常のさまざまなことについて話す良い機会でもあった。若い女性たちは巡礼について話し、年配の女性たちは昔の思い出話をするのが常だった。

「巡礼の帰りに吉野を通って、義経と静御前が出会ったと言われている桜を見に行ったんや」と、ななは田植えの前に皆にお茶を注ぎながら言った。

「あぁ、おめぇは何べんもその話を聞かせてくれって言うとったなぁ」と、泥だらけの足でゆうさんは答えた「おめぇが幼ねえとき、何千回と話したわ。まだ話し終わる前から、もう一回話してくれ言うもんやから」

ゆうさんは、ななが2歳のとき養子として迎えた。母親はななを連れ、その晩の宿を求めてゆうさんの家に訪ねてきた。子供を養えない母親が、その子の面倒を見てくれる人を探すのはよくあることだった。その夜の夕食後、

ゆうさんは母親に、この子には義経と静御前と三万本の桜の話をしながら添い寝してあげようと持ちかけた。案の定、翌朝母親はいなくなっていた。その日からななはゆうさんの養女となったのだ。

「もうほんまに何べんもななが『もも、お願いやからこの道から行こう』て言うもんやから」

「ちょっと、真似せんとってよ」とななはももの肩を叩いた。

「村に帰るのが遅なるよって言うてんけど、この頑固もんが行く言うて聞かへんから行くよりほかなかったわ」とももは笑いながら続けた「そやけど、吉野の桜並木はホンマにきれかったわ」

「それに真美っていう女の人にも会えたしな」

「そうそう、真美は神峯寺で筆耕係をしとるねん。ええ人で家にも泊めてくれたんやけど、そこでふみこに出会ったんやんな。」ふみこは田んぼの端でうなずいた。

「真美が言うには、真美のお父さんの家族は、水野家がお寺の管理を続けられるように真美を結婚させようとあらゆる手を尽くしたけど、真美は嫌がったんやて。ほんなら真美のお母さんの家族は、その機会に真美のいとこが家を継いでお寺の管理を相続することを提案したんやって。そやけど、いとこの奥さんは名字を変えたくないらしいわ」

「でも奥さんは結婚したときにもう名字が変わってるやん。何が違うん？」

「まぁ奥さんは寺を管理する権利が欲しいだけやろ」

「ほんであの子は何というとるんや」とむうさんは聞いた。

「あの子って誰？」と下着をつけていないむうさんの服を木の枝で持ち上げながら、しぃさんは答えた「慈悲深い観音さんやがな」みんな爆笑した。

腹崎に来てから、ふみこは警察や巨大プロジェクトを担当する当局による継続的な脅迫、威嚇、そして手あたり次第に逮捕するさまを写真に収めてきた。村に通じる唯一の道路に公用車が近づくと、山口の家からドラム缶が打ち鳴らされ、他の住民に注意を促した。住民はすぐに作業を中断し、警察が村に入るのを阻止するために団結した。ある時、300人の機動隊と重機を伴った建設会社が、河川敷の測量をするために許可証を持ってやって来た。住民により建てられた木々や柵をなぎ倒し、測量中に村人が侵入しないように、盆地の周りにフェンスを取り付けた。村人たちは「帰れ！帰れ！」と叫びながら草を燃やし、その煙を彼らに投げつけて目を刺激し、牽制した。警察は消防隊とタンク車の応援を要請したが、教員養成学校の

学生たちはそれを予測し、事前にトラックで道路を封鎖していたため、消防隊は侵入できなかった。取り囲まれた警官隊は「土地を売って退去した方が身のためだ」と繰り返した。それに対し、暗闇の中にとどまる村人たちは、浄化槽の廃棄物を投げつけて応戦した。翌朝、ようやく消防隊と200人の補充警官隊が到着すると、数百人が負傷し、数人の逮捕者も出た。ふみこは警察官が百姓たちを地面にたたきつけ、パトカーまで引きずるさまや、女性たちが素手で警察の盾を押したり叩いたりしながら、「父親から百姓を殴ったり殺したりするように教えられたのか」と叫んで訴えている姿をフィルムに残した。数日後に彼女らは全員釈放され、村ではメンバーの帰還を祝いつつ、「次は土地の収用命令と村を一掃する部隊を連れて戻ってくる」という警察からの脅しを受け、抵抗勢力を再編成した。

「初めて会ったとき、なながこんな話をしてくれたのよ」と、ふみこは草の陰で休みながらゆうさんに話し始めた。

「昔この川は真実の水が飲める場所だった。ある日、山に住んでいた男が真実の水を飲むのと引き換えに右目を差し出したって聞いたわ」

「そうや、その話はここいらじゃあ有名や。村の由来が記された風土記にも出てくる。真実の水を飲んだ者は、記憶をつかさどる力を授かるんやけども、その代わり片目でしか物が見えなくなると言われとんや」

「記憶は正しいの？」

「母ちゃんがよう言うとったのは、忘却というものほんまにあるかどうかは分からんけど、記憶というものは人間の力では無理やと。思い出や記憶という言葉はその可能性を含んどるだけで、こんなことを覚えとる、あんなことを忘れとるっちゅうのは人間の願望であって、それ以上のもんやないわ。ふみこ、もし記憶や思い出をコントロールできるようになったら、この世界がなんか変わるやろか。その男は川の水を飲んだ後、自分に真実があるんやと主張するようになった。過去の声を聞いたり、繰り返すことができるようになったからや。男は村から村へとまわり始めて、村人らにその村の始まりについて頭に浮かんだ記憶を話したり、村の住人が忘れとったことを思い出させたんや。村人とあいつらの記憶の中にある世界との間に、無理に関わりを生み出だそうと、男は百姓らに太古の儀式、つまり神々の過去に敬意を表するために従うべき儀式や伝統を指導していった。こないしながら過去の声は、話す、読む、書く、聞くという体制を形成していったんや。「真実」をめぐる集合意識が村人らの中につくられていって、その男はキュクロプス王と呼ばれるようになったんや」

「キュクロプス王は、片目でしかものを見ることができないんでしょ？」

「そうや、理屈では片目でしか見えんのやけど、男は真っ当なことや常識をわかっとるんや」

「ゆうさん、その男の奥さんは自殺したそうだけど、どうしてお腹を切って死んだの？」

「風土記によると、キュクロプス王が帰って来んかったから、女は見捨てられたんやと思うたらしいわ。嫉妬と怒りに駆られて短剣で川の近くで腹を切り裂いたそうや。そのあと、出血多量で内臓を出したまま、女は川に身を投げた。それ以来河川敷は解き放たれ、生気を失ったと書かれとる。その女は腹が割れとったから、『腹崎（ハラサキ）』と呼ばれて、風土記ではこの辺りの地名になっとる。しかしもう気づいたかも知れんけど、わしらは『腹咲（ハラサキ）』と書く。この物語は多くの物語と同じように、女が自死するっちゅうのは、孤独、恥、怒り、罪悪感からで、腹を切るのは自分が女ということを呪うためやと見なしとる。後々ほかの場所でもようさん書かれとるように、川は腹咲の血とはらわたによって汚染されて、真実の水が飲める場所やなくなった。女が何を理由に自死したんかは定かやない。自らの死を選んだ者は、究極の表現力と沈黙の力を持つ。わしに言わせれば、腹咲は自分の身体をもって、理屈から自分を切り離そうとしとったんやないか。ほんで今、女の腹からわしらがつくる紙、植える稲、川で洗う豆が花咲いとるんや」

「その通りだわ。河川敷の水と土は、この土地の特徴を紙に与えているものね。写真も同じだわ。メタファー、芸術、神話そのも、そこにあるものとないもの…。私の友人がよく言っていたのは、体はネガフィルムでなければならないということ」

「ほんで体は、さまざまな土地の特徴ととそこから生まれる形態によって条件づけられる。言語様式も例外やない。女の腹からは汚物が出たんやなくて生き生きとした表現が生まれたんや。女の血はわしらを養う土を潤し、腹咲の体はわしらが住んどる領土なんや。女性たるものの存在や自死については今でも謎やけど、わしらはちゃんと解釈してその物語を語り継いでいかなあかん。それがわしらの存在意義、抵抗することの基本原理なんや」

夜になり、周りが見えなくなるまで女性たちは水田で働き続けた。暗くなる前にふみこはズボンで手を拭き、泥だらけの体でカメラに向かってほほ笑む彼女らを撮影した。急斜面からそびえ立つ階段や木々とは対照的に、彼女らの身体は足まで漬かった泥に深く根を

下ろしているようだった。水田に張られた水は、稲の束が二つの似ているようで遠い世界の間に宙づりにされた大きな水晶のように輝いて見えた。道を歩きながら、ふみこは水田に火の山のように映し出された太陽を見たが、夜の訪れとカエルの泣き声とともに静かに消えていった。しかしながら、水田の底には太陽の燃えかすが残り、血のような赤色が水の中に広がり、これから育つ穀物に浸透していくのだった。

＊

電車は昔、天照大神が祀られている神社への巡礼者たちが通った道を、再び進み始めた。車窓からは、環状に連なる丘に囲まれた集落が見え、それぞれの丘は無線の見張り番によって監視されていた。下草と電線の間で、影に包まれた車両に太陽の光が反射した。まるで写真のネガフィルムのように、ふみこは自分の顔に光が当たるのを感じた。その光が微笑みをたたえた彼女の頬骨を照らした。その頬はまるで果実を覆う緑の葉の合間を縫って差し込む、夕暮れの赤みがかった光に触れた小さな桃のように見えた。ふみこは自分の思い出を、さまざまな花や茂みが芽吹く山だと考えていた。山の上に昇る太陽のおかげで、空へと伸びる木々や花々の影が濃く、くっきりと形作られ、やがて地面に散っていくのだと彼女は思った。おそらく植物たちは知らずに自分の体をネガフィルムにしたのだろう。太陽の真っすぐな光に照らされ、もう何も残らなくなったときに記憶としてとどまる軌跡を。ふみこはカメラを取り出すと、中のフィルムを巻き戻し、ロールを取り出した。そのネガフィルムには、今は土砂に埋もれているゆうさんが、いつかのあの日、抵抗している姿が記録されていると思った。

突然、車両の影から一人の男がやって来た。君は誰かに似ている、と彼は言った。

「それはあなたが愛した人？」彼女は振り返らずに答えた。

「ふみこという名の女性だ。君と同じ傷跡があるんだ」

「私の名は卑弥呼」

「卑弥呼」　後書き

Andrés Camacho

少し前の日本では、学生や百姓が大学のキャンパスや土地を暴力的に占拠しました。1950年から1970年にかけて、学生による抗議運動は全国各地で起こり、政治や大学の機構に対する暴力的な芝居や、日米安保条約（ANPO）に対する度重なる反対運動が特徴的でした。同じ頃、1960年代には千葉県三里塚で成田国際空港建設のための土地売却に反対する百姓勢力が台頭。土地は資本ではなく領土であり、居住する文化的堆積物であり、想像と現実の基盤である」と主張する農民たちを、国は土地を収用し、暴力的に立ち退かせました。マスメディアは学生や百姓を疑い、彼らの抗議行動の暴力性や動機の曖昧さを強く非難しました。しかし彼らは、文明開化システムがその経済プロジェクトを日本に押し付けた冷徹で量的な論理への反対を表明しただけでなく、歴史、文化、政治を通して、学生や百姓の身体に暴力的に現れている近代的な構造にも反応したのだと思います。

ふみこは写真を撮ることで、違う時間に物事を見ることができます。そして、私の友人デリダが言うように、この写真のヴィジョンは、他者性のように、まだ来ていない考察の一部なのです。

卑弥呼』は4部作の第2部です。

LILIANA FILOMENO

リリアナ　フィロメノ

/lily.lamultipotencial
www,tayol.mx

写真・文章
リリアナ

ウエヤパン プエブラ

「トジミパヨク　リリアナ」

バラの庭のような原始的な土地の思い出を残しています。その日は太陽が高く、アボカドの木の葉の間から光線がのぞいているのが見えました。その木葉は日陰で大気を涼しく保つ家の屋根のように厚かったのです。木の足元には枯葉が敷き詰められ4歳の頃よく遊んだものです。地面には丸太がいくつかあり、毛布やフクシアローズの刺繍が施されたトジミパヨクを枝に結んで、布製の人形を寝かせるためのゆりかごを作るのに最適だったのを覚えています。家となった木の膝の下で、時間はあっという間に過ぎていきました。突然「食べてきなさい」と呼ぶママの呼び声が聞こえてきました。すぐに人形を手に取り、ゆりかごの解体を試みましたがうまくいかず、後で全部取りに来ようと思いました。しかし帰ってくるに数日かかり、帰ってきたときまでにはもう刺繍したバラのトジミパヨクは見つかりませんでした。今は枯れて土に還った薔薇のトジミパヨクが私のお気に入りの衣服だったと母は言っています。それ以上に毛布、ベッド、傘、ゆりかご、友達として愛着があり、毛の傷のような感触が私の顔をなでながら眠ったものです。数年後、私は職人になり、自分の手で布の庭や森を作ることを学びました。

私の最初のハンドメイド作品は私が忘れた布に描かれていたのと同じような花々で刺繍された猫でした。私の話は特殊ですが、私のコミュニティの住民はそれぞれ自分のと作品深い絆を持っていると断言できます。トジミパヨクはメキシコのプエブラ州北部の高地にあるフエヤパンで生まれた手製の衣服です。クロスステッチと四隅の古代ステッチで色とりどりの刺繍を施し、ナフア族の領土の地図として作られています。トジミパヨクには山や川、バラやアボカド、松や樫の木、シダ植物、馬、ラン、アルマジロ、猫、犬、鳥、ネズミなど、中山間地有の植物や動物など数えきれないほどの自然の要素が刺繍で描かれています。男性はこれらの自然の要素を刺繍をしたシャツを女性はトジミパヨクを身につけます。ウエヤパンの人々は雲霧林に生息し、雲霧村は私たちに生息しています。ウエヤパンの人々と自然との関係を聞かれたら、間違いなく「私たちの皮膚にあるもの」と答えます。

FUKUI TAKAHISA

福井孝尚

/fukuitakahisa_photograhpy
www.fukuishouten.com

写真・文章
福井孝尚

奈良県東吉野村

「山のエネルギー　福井孝尚」

村に住んでいると、山はとても身近な存在だ。山の麓で暮らす我が家では、数年前から薪ストーブを愛用している。理由は二ある。一つ目はこの村の冬がとにかく寒いこと。石油ストーブやファンヒーターではとても太刀打できない寒さだ。この寒さには「底冷え」という言葉がしっくり来て、身に沁みる。とにかく力強い暖房機が必要だった。二つ目は山の近くで生活するうち「山のエネルギー」を暮らしの中に取り入れたいと考えるようになったからだ。山の木で拵えた薪からは直にそのエネルギーを取り込む事ができる気がした。近年、山の手入れの過程で出た間伐材は何かに利用される事もなくそのまま静かに土へと還される事が多い。僕たちはたくさんの人の協力を得て、山からの「お裾分け」としてそれらを頂いている。山には不思議なエネルギーが溢れている。山に入ると感じる気配。撮影を通じて感じていたものは、その一部なのだと思う。僕はまだそのエネルギーを「熱源」という形でしか生活に利用できていない。この地域の先達はそれらをもっとうまく様々なものに活用してきたのだろう。僕たちはもっとその術を学ぶべきだと思っている。山のエネルギーはこんなにも身近に、たくさん眠っているのだから。

CASANDRA CASASOLA

カサンドラ カサソラ

/cas.casasola
casandracasasola.com

写真・文章
カサンドラ　カサソラ

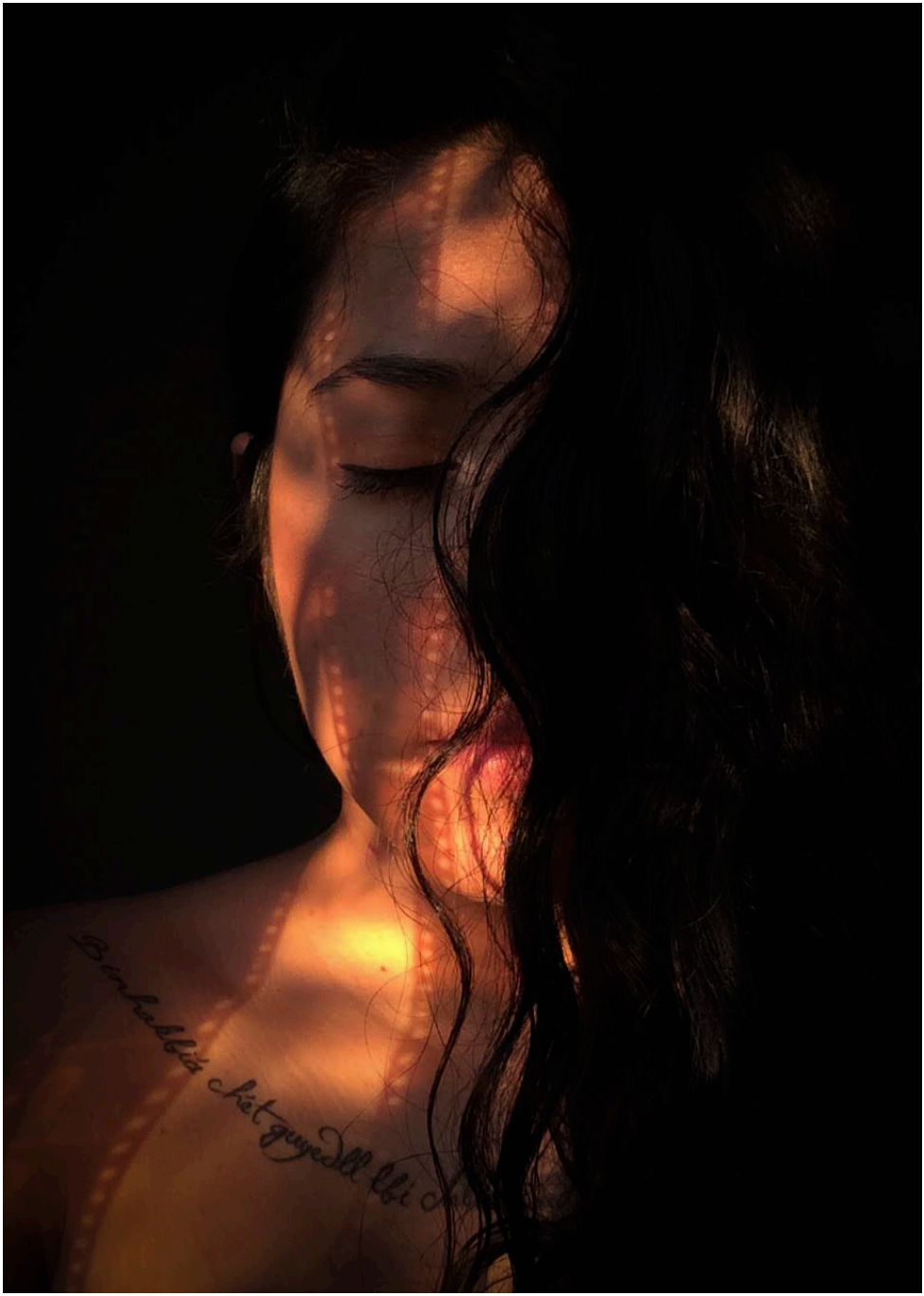
ポートレート
イバン　ヘルナンデス
instagram/viryviry

GUELATAO DE JUÁREZ, OAXACA

ゲラタオ デ フアレス オアハカ

「カタルシス　カサンドラ」

私は自分の身体を領土と考える。領土は所有されるものではなく現在と過去において私にコミュニティによって常に変容しているものである。私が移住してきた場所は私の一部であり、だから私の存在は私の家であると信じている。この一連の自画像は、私のルーツを象徴する祖母から始まります。祖母は私たちの領土を体で守ってくれました。そして、これらの自画像は、私の動物的カタルシスへと続きます。別の時代の痛みを受け継ぎながらも、今は太陽を受け入れる動物。



MASUDA YUYA

増田雄也

/yuya_tonton
www.higashitoyo.jp

写真・文章
増田雄也
ポートレート
中西良太

NARA,YAMAZOE KEHARA

奈良県山添村毛原

「増田雄也の話」

昼は明るくて夜は暗い。そんな当たり前の事を山添村でもう一度知る事が出来ました。山添村は私が生まれ育った場所で子どもの頃は友達と近くの裏山で秘密基地をつくり、崖を登って日が暮れると家に帰る。木と土と川に触れて木の棒一本あればそれだけで勇者気分。そんな幼少期の過ごし方でしたがその中でもやっぱり都会に憧れはあり、土日休みには家族に出かけることをせがんで外に連れて行って貰うのは至福に感じてました。それが募ったのか二十歳時就職先は大阪の飲食店を選び三年間一人暮らしをしました。夢見た都会生活である色々な人、場所、食、衣に触れてこんな世界がのかと刺激の毎日でした。ですが同時に新型コロナウイルスが流行し帰省の選択肢を無くされてしまいました。しばらくしてコロナが緩和された時帰省すると何年も見続けてた景色なのに車窓から見える木々山、川の神的な美しさそして家で出てくる元野菜の料理の美味しさ感覚としては初めて味わったようなもので、故郷だからかもしれないがこの自然から得られるエネルギーや高揚感は大阪で何を見ても味わえなかった物だなと改めて気がつくことが出来ました。

そこから山添村の食村、好きなフィルムカメラ、映像を用いて自分自身が自然を知るようになりそれを知って貰えるよう今は山添村で生活をしております。

OYO BASE

NISHIOKA KIYOSHI

西岡潔

/nishioka_kiyoshi
nishioka-kiyoshi.com

写真・文章
西岡潔

NARA, HIGASHIYOSHINO

奈良県東吉野村

「自然界と人間」

西岡潔

持つということなのかもしれないとよく感じる。

宇宙も含め途方もない大きな自然の中に人間は存在している。村に住むということは自然と関わり四季を感じ次に訪れる季節の準備をする。野花や昆虫や鳥の鳴き声と共に家の裏の筍、梅、栗、柿の木の実りを予感させ収穫する。毎年の循環そこに大きな感動を覚えた。朝と夕方に収穫するよ。夜は動物たちの時間帯その循環の中には「買う」という行為が含まれない、都心に住んでいた頃には考えられない経験だった。そして草刈りという定期的に行わなければならない仕事がある。これを怠ると家が植物に覆われ自然に帰っていくことになるのだ。私が住む東吉野村の山は、ほぼ杉と檜の木で覆われている。それらはこの地に代々住む人たちの手で植えられ大切に手入れされてきた。この山を自然と呼ぶのかというと木の畑のように私には映っている。この地の林業の歴史は500年程になると言われるが戦後80年弱の間にこの山々の姿も変容しほぼ植林の山となった。現在は林業の担い手も減り手入れも難しい状態だがそれも自然の時間サイクルの中で変容し落ち着くのかもしれない。自然の中に身を置き写真を撮りたい色んな場所に出向き大自然とるのだから。呼ばれる山の中で夜を過ごすこともしばしばだったが、私以外の人が居るはずのない場所でも人の存在を必ずのように感じてきた。空を飛ぶ飛行機の音に目が覚めることもよくあることだし、夜空の写真を撮ればそこには衛星が写り込む。

LUVIA LAZO

ルビア ラゾ

/luvialazo
www.luvialazo.com

写真・文章
ルビア　ラゾ
ポートレート
ルビアを手伝ってた村の子ども

TEOTITLÁN DEL VALLE, OAXACA

テオティトラン デル バイェ、オアハカ

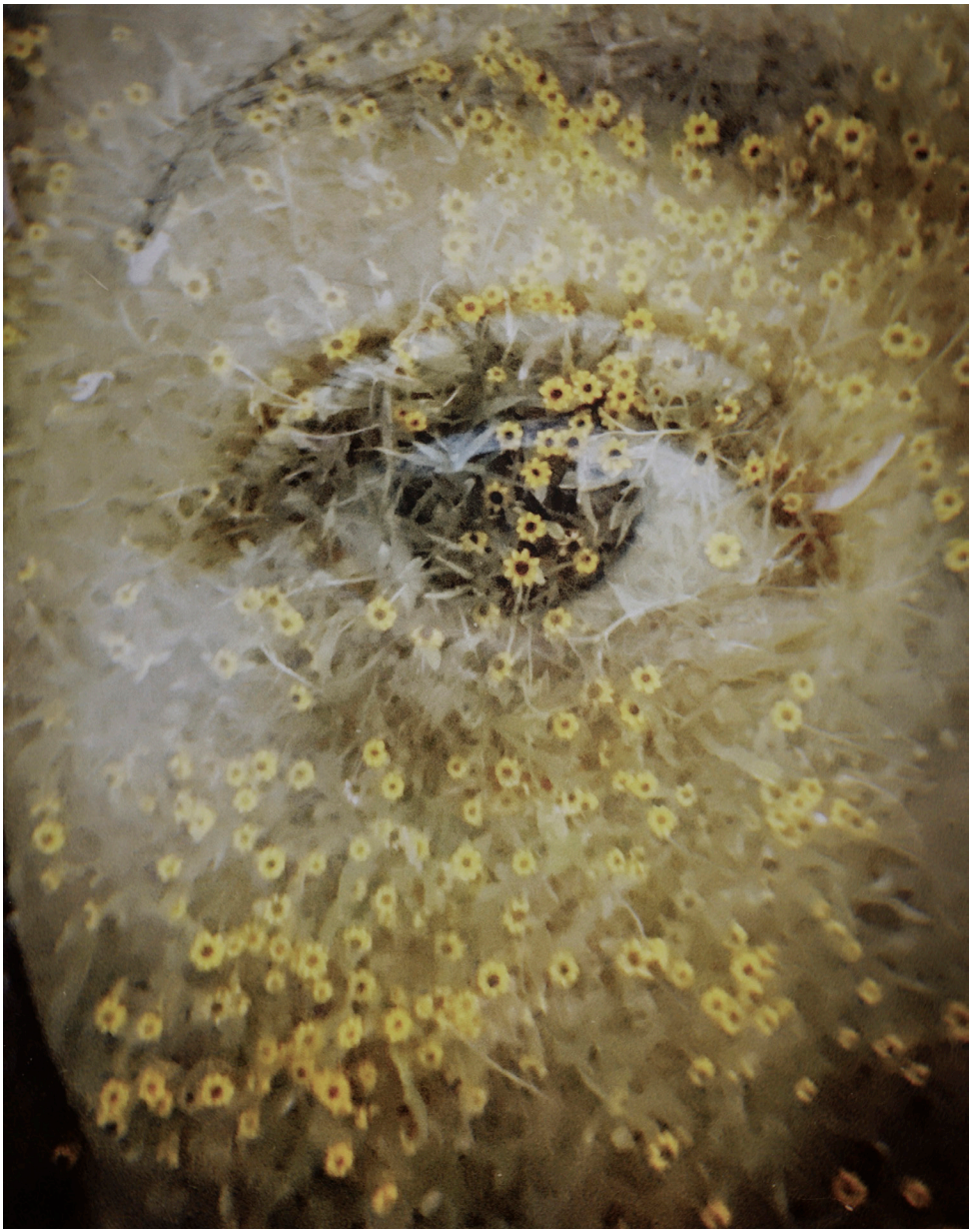
「本物の水　ルビア」

人はどのように世界に存在するのでしょうか

人はいくつの世界に存在できるのでしょうか

私は子供の頃、テオティトランを離れ、他の場所を知り、旅し、飛び、感じ、歩き、自分の村以外の場所で呼吸することに憧れました。オアハカの南にあるこの小さな場所が、いつか私を窒息させてしまうのではないかと思っていたのです。先月私の体は動き、飛び、歩き感じました。私の目は別の空を見、別の水を飲みました。そう、世界では水は違うもので名前さえも変わります。「スティルウォーター」と呼びます。つまり「まだ水」と言いますが、私にはそれはもはや水ではない味に感じられます。別の場所にいると他の生命との形を見たりいつもとは違う表情に出会ったりしていつも心の中で生きていたのが体に戻ってきます。それは、他の場所でテオティトランの回想や断片を探すことの連続です。しかし、その小さな地域の一つ一つのが私の心、私の体、私の目、私の手、私の口の中にどれほど埋め込まれているかを知るためには故郷から離れることが必要なのです。私は歩きながら光や静けさと花や植物を探します。

どんなに似ていない世界でも、自分の足を踏み入れて自分がいつもいるのと同じ世界にいるのだと感じられる土地を探します。見つけた花の中に母を見たいし顔をなでる風の中に祖父を探します。風はどこに行っても同じように感じれるからです。ピザーニクは「私の国は私の記憶」と書いています。その国にたくさんの花が咲いて、本物の水を飲んでいることを付け加えたいと思います。



Andrés Camacho

アンドレス カマチョ

/solo_andoresu
/japoneschido.podcast

写真・文章
アンドレス
ポートレート
福井孝尚

NARA, HIGASHIYOSHINO-MURA

奈良県東吉野村

「山の存在　カマチョ」

東吉野は奈良の奥山にある村です。山はあらゆる超自然的な存在が宿る神秘的な場所であると同時に人々がその土地をアジールとし自身の領土してきた場所でもある。東吉野の山には人々の集合的な記憶が残り様々な祝いのリズムを持つ文化の堆積があります。そのひとつが「とんど」です。村の一人が「とんどは、しめ飾り人や縁起物を燃やすための火の山であると、同時に山はすべてが永久に変化する神秘的な場所であることを思い出させるものや」と話してくれたのを覚えています。また、とんどは村の子どもたちが集まって遊び火をつけるための丸太を集め、神々に感謝するために空に舞い上がる龍のように火を煽り続けるための餌となる場所でもあった。今では山村に駆け込んで薪を集め、火を長持ちさせる子どもたちは少なくなったが、村に残った村人たちは子どもの頃と同じように真剣にとんどに火を灯し続けている。

IMAGAWA ERI

今川恵里

/eri._.ttsu
/erittsu_art

写真・文章
今川恵里

NARA, YAMATO-SAIDAIJI

奈良県大和西大寺

「今川恵里の話」

人は生きている中で美しさに触れ合う機会は多々あると思います。美術館に行き絵画を眺めたり、ショッピングモールに行き、多彩な色や柄のお洋服を買いに行ったり、もしくは近くの自然に溢れる公園に散歩に出かけたりと身近な場所に美しさはあります。その中でも最後に述べた自然の美しさが私は大好きです。なぜ人は雲の写真を撮るのか、なぜ木漏れ日に人は感動を覚えるのか。それは流行っているからではなく、スタイリッシュだからでもなく自然であるからだと思います。人が意図して作った芸術ではなく、に感動を与えてくれるのです。私はこの人と自然の関係を大事にし続けていきたいです。

村　エス　チド
MURA ES CHIDO
使い切りカメラプロジェクト

使い切りカメラで現在の吉野野村の暮らしと村民が好きな東吉野村を今日の歴史としてドキュメントすることです。

＊

メキシコでは「CHIDO」という意味はあなたが何かが「好きや」と言うために使っている言葉です。そして「MURA ES CHIDO」「村が好きや」という意味です。

MURA ES CHIDO
Proyecto fotográfico con cámaras desechables

Este es un proyecto en el que lxs habitantes de Higashiyoshino, una comunidad rural agazapado en las montañas de Nara, Japón, utilizan cámaras desechables para documentar su vida y las cosas que les parecen chidas de vivir aquí. Con esto, se develan múltiples figuraciones de su vida. Un territorio de sensaciones enlazadas por memorias, emociones y experiencias de la comunidad rural a la que pertenecen, y de la lógica indefinible que los mueve. Para este número, MURA ES CHIDO presenta las fotos de Ohtani Saiki.

第二号

PRODUCCIÓN 共同制作
Higashiyoshino 東吉野村
Andrés Camacho アンドレス カマチョ

EDICIÓN Y TRADUCCIÓN 編集 翻訳
Andrés Camacho アンドレス カマチョ

FOTOS Y TEXTO 写真・文章
Ohtani Saiki 大谷彩貴

Más de MURA ES CHIDO en:
www.tokidokihyakusho.com/muraeschido

OHTANI SAIKI

大谷彩貴

東吉野村は
ユニークで面白い人たちが集まる変な村。そしてフレッシュな村。

東京都の出身。平成二六年四月に東吉野村小栗栖に移住しました。

***Higashiyoshino** es un pueblo único en el que se juntan personas muy raras, lo cual está chido. Además, es un lugar bastante fresco.*

Ohtani llegó a Higashiyoshino desde Tokio en abril de 2014.

これでいいのだ！

*¡Así está bien!**

大谷彩貴の好きな言葉です。

**Palabra favorita del buen Ohtani Saiki.*

TOKIDOKI HYAKUSHO REVISTA RURAL
ときどき百姓ルーラルマガジン

5to. año de Reiwa, septiembre de 2023
令和五年七月第一刷発行

Editor *Andrés Camacho*
発行者 花万著

Publicación *Tokidoki Hyakusho Editorial*
発行所 ときどき百姓発行所スタジオ

Prefectura de Nara, Higashiyoshino, Ogawa
奈良県東吉野村小川

『ときどき百姓スタジオ』

SNS www.tokidokihyakusho.com

instagram/tokidokihyakusho

instagram/solo_andoresu

Imprenta FUJIWARA PRINTING Co. Ltd., Nagano.
印刷所 藤原印刷株式会社

SUSCRIPCIÓN ANUAL

TOKIDOKI HYAKUSHO

ときどき百姓をサブスクライブ！

「サブスクライブ」定期便で数量限定のオリジナルギフトパックの年間購読を年4回「第1号〜第4号」ご自宅やオフィスや店舗へお届けいたします。

*

サブスクライブしてくれた方へ数量限定版のマガジンとオリジナルパックを定期便でお届けします。

Suscríbete a la TOKIDOKI HYAKUSHO por un año para recibir por correo postal cuatro números de nuestra revista, comenzando por la mítica revista no.1, la cual siempre termina por volverse el número más ansiado. De la revista se imprimen pocos ejemplares, por lo que suscribirse te garantiza recibir la TOKIDOKI HYAKUSHO en un paquete original que hace único cada ejemplar.

SUSCRÍBETE EN
www.tokidokihyakusho.com/suscripcion
サブスクライブはこちらです！